

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

1562年3月11日に、ポルトガル国王ドン・セバスチャンが大友義鎮(宗麟)に送った書状の写しが、リスボンの科学学士院図書館にあります。

ドン・セバスチャンは、祖父であり先代国王のジョアン3世が57年に没した際に4歳で即位しました。実際の政治は、祖母のカタリナや大叔父の枢機卿ドン・エンリケが摂政として代行した幼き国王で、当時33歳の義鎮に書状を送ったのは9歳の時です。

書状でドン・セバスチャンは義鎮に、「Nobre e honorable Bungo」(高貴にして徳高き豊後大公)と呼びかけます。そして、はるか日本の豊後の地でのキリスト教布教の許可と、そこで活動するイエズス会員たちへの義鎮の庇護を、最大の言葉で謝しています。

さらに、「予は卿(義鎮)自身やその家臣たちが予に依頼する、道理になかったあらゆることを常に喜んで行ない、予の王国の者たちや家臣たちが卿のために依頼されたことを実行する」と述べ、義鎮改宗の引き換え条件として、大友氏側の依頼を受諾する準備があることを明言しています。当時のポルトガ

ポルトガル国王 ドン・セバスチャン



大友義鎮に書状を送ったポルトガル国王ドン・セバスチャン

ル国王にとって、「徳高き人物」とたたえる「豊後大公」のキリスト教受洗が、東アジアの日本全体での布教活動の成功を占う「大きな期待」として認識され、その義鎮との書信交換(国交)が待望されていたことが分かります。

このように、1560～70年代日本の戦国大名は、東南アジアのタイやカンボジアのみでなく、ヨーロッパのポルトガル国王との間でも、ほぼ対等と考える国書の交換や外交・通商協約の締結を模索し、それに成功していました。こうした事態は、これまで日本の有史以来、例えば3世紀の卑弥呼が魏に遣使したり、15世紀の足利義満

が明王朝に朝貢したりして、中華世界の周辺国の一つとして中国皇帝から「日本国王」に冊封されることで維持してきた日本の伝統的國家外交のあり方を変質させることになりました。

16世紀後半に「国」意識を成熟させた戦国大名が日本の「地域國家」の代表としての外交権を行使したことによって、以後の日本外交は、対中国朝貢外交のレジームを脱し、相互利益に基づくフラットでシンプルな国家間交渉へと変化していきます。大友義鎮がドン・セバスチャンと結んだ豊後―ポルトガル国交をはじめ、戦国大名たちの海外に向けた一連の外交活動が、「中華」に縛られてきた東アジアの伝統的な國際秩序を突き崩す契機になったのです。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1日掲載

義鎮との書信交換を待望